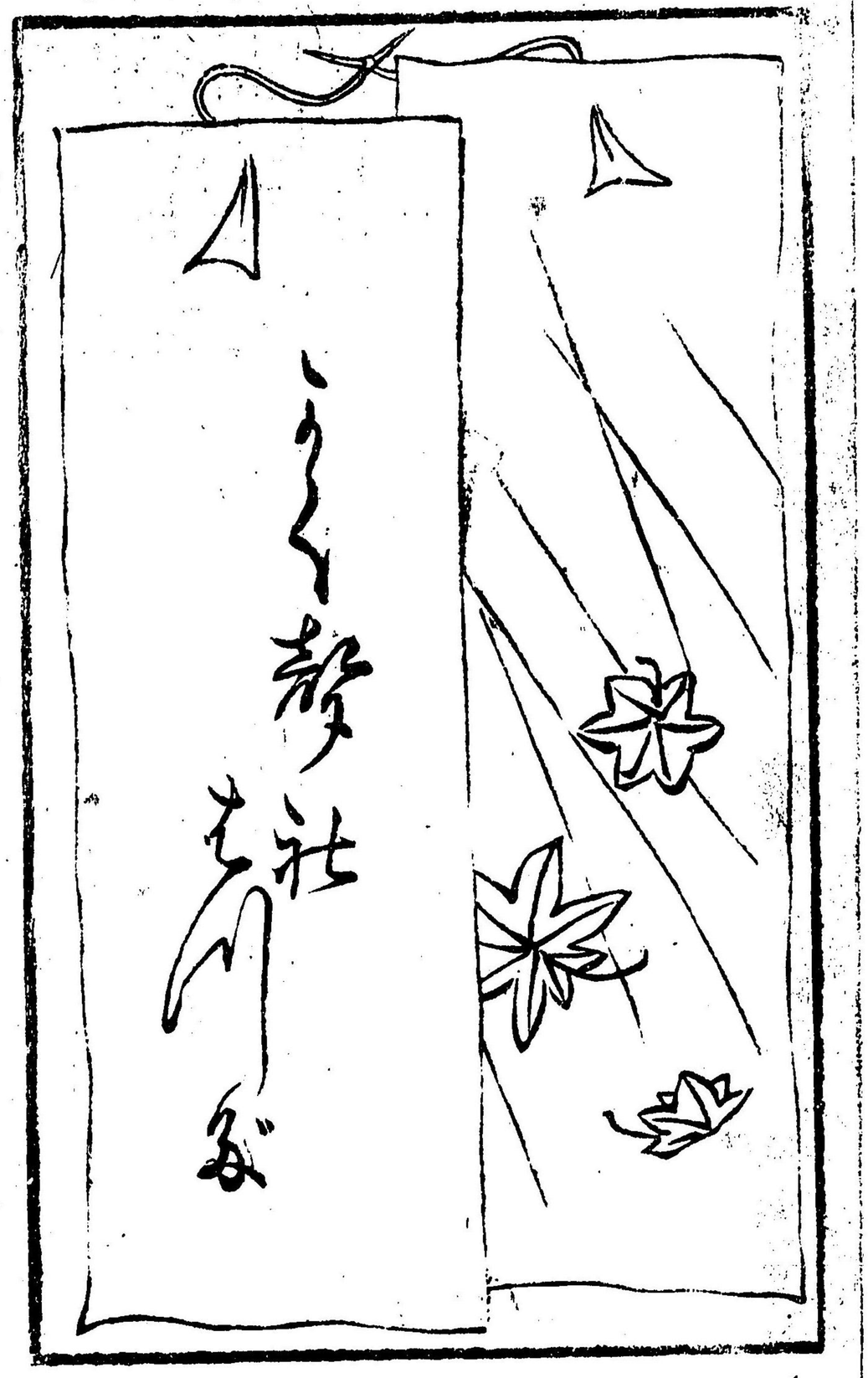
850

實説双紙 伊賀越仇討 全



叙

四海各國みな君父の爲に仇を報ずるの擧敢て無よしあれども我日本ほど往古より此事あり世に知らるゝもの甚多かり德川幕府の世に到り就中其大いなると赤穗の義士の復讐之に次ぐ賀の上野の仇討と爲るか然るに義士の話は世に流布の書數類あり因て今茲に隅田園氏が伊賀越の復讐と記しさるは牛打童糸操乙女の爲に月待日待の遊びよ替て之を見せしめ親不孝おらざるべからざるの演説代りに做んとの心にやあらん噫開化の内にも固有の道い外して掛らぬやまと魂ならんかし

梅亭金鶯識

伊賀越仇討物語

東京　隅田園春曉編集

○第一回

既代万歳と祝したる徳川三代の將軍家光公の治世に當り備前岡山の城主と仰がれたる松平宮内太輔忠雄と云へるい池田家隨一の家柄とて臣下の士最多かりし中に渡邊靱負と云へる文武の二道に疎からぬ一個の侍あり同家中の河井又左衛門といい恩義と懷き假初にも兄弟の因を結し程なる信友なりしが彼河合が所持爲る政宗の名劔あり是い又左衛門父又五郎と云へる勇士古池の底を見屆し際圖らずも得さる無名の劔ありしと又五郎其劔の燒刃正宗に似たりとて金象眼を以て河合正宗と名を被せ家の重寶と爲しけるが其實い千壽院村正が一世一振の妙作なりと云へり然るに渡邊靱負の家にも舊く傳來せし正眞の正宗在しが元和元年大坂一戰の際祖父金之亟と云る人公の既馬前にて討死せし時携え敵ゐ奪いれしかば父金右衛門い祖先より傳へ來りし正宗と失ひたるを憂ひ何卒正宗の一刀を求めて先祖の紀念代とあし子孫に傳へんと必懸たれと不幸にして志を遂す世を去ぬ因て靱負も亦其志を繼正宗の名刀を得ゞ欲と思ふ折柄河井の家に正宗の名刀を所持爲る由を聞き何卒して其刀を乞ひ得て家重代の正宗ゐ代所藏せんものゝと思ひ或日又左衛門の許に訪ひ四方八方の浮世話の折柄何卒我等に正宗の名刀既讓り賜るとい成難きや其子細と云ふい斯くしかく云々の事故ありてありと過よし元和の初め大坂にて金之亟が討死の事抔委しく物語しかば初めて聞し又左衛門も偖い左樣した子細の有しにや其事と今日迄語られざれば

知る由もあき貴殿の心願懇望ゑ任せて譲り度い存れども奈何ゑせん武士の魂とも稱すべき父より傳來の正宗の一刀我手づから渡してハ父へヤ譯立難し然ハ斯爲られよ今宵庭口より來りて密に彼正宗を持行るべし去とて互ゑ承知の上なれハ貴殿が賊を爲しに非らず正宗ハ奥の床の間ゑ備え置べけれと事を譯さる又左衛門が信義の課らひを靱負い喜悦然らハ仰ゑ隨ふて今宵參上仕べしと契約なしてぞ別れけるか川井又左衛門い靱負が跡ゑて庭へ立出花檀の植木を直さんと鍬を携え土を耕ちけるに二尺餘の蛇の幡ゑりて居たるを知らず其蛇の首を誤て打落しけれハ是い思いざりき殺生を仕爲したるよと潜咳ひ〳〵邊りを見るに蛇の首何方へ飛去しか更に知れず早黄昏ゑ成しかハ其儘に打捨置き浴しつ夕飯を食め抔して正宗の一刀を箱の儘に奥座敷の床の間に飾り置き又左衛門い次の間にて抹茶を一服點ばやと鑵子を爐に懸しが湯の沸騰しを見て蓋を取退し儘次の間へ茶入を取に立し途端に渡邊靱負が豫て約束爲し置しとあれハ庭口の切戸を開いて飛石傳ひゑ座敷の樣子を差覗き〳〵ふ折しもアラ怪しや花檀の中より一團の光り物飛出すよと見へたりしが次の間なる鑵子の中へ

飛入たり心得難き怪異と見るものかあと靱負い須臾猶躁つ〳〵彼方を屹度覗視所へ斯とい知らず又左衛門茶入携へ出來り茶碗に湯を汲取りてアハヤ飲んとする体ゑ靱負驚き大音ゑ其湯に怪敷事あろ有れ待たまへよと止めけれハ又左衛門打驚きて此方を見遣りて何故あるぞと怪しむ所へ靱負いそぎ座敷へ通り今庭口より入來る折柄怪敷光り物鑵子の中へ飛入しを見留たる故止めしあゝと聞て不審し又左衛門鑵子の内と改め見れハ蛇の首煮爛湯い油ぎつて有けるにぞ扨い夕擊ゑ打殺せし蛇めが我等へ怨を報んと爲し

たりしが是い恐敷事ありさ貴殿此所へ來合せざれば我一命にも係るべきを除れしい偏に貴殿の注意ふ依所なり我命の恩人なりせば改めてその恩謝の爲に貴殿へ刀い讓るべしと正宗の一刀を携へ來りて靱負が前に差置ば靱負い頭上を左右に振今宵課らずも貴殿の危ふきを救ひしい我等が爲しさる所に非らず正宗の名劔の奇端に依るとならん斯の如く貴殿を守護する名劔を意あく懇望致せしい我等が誤り最早望の意絶たり猶大切に所藏ゐし給へやと押戻し再度受納る景色あし然れど又左衛門も一旦義ふ依て讓んと爲したる一刀を其儘にして所有に爲し置い忍苦し茲において此正宗の一刀い渡邊家の所有と定め我等が許へ預り置べき證書を呈じやすべしと又左衛門より靱負に一通の文を渡しけるい正路潔白の武士ところ云ふべけれ

○第二回

然て月日ゐ關守なく十有余年の春秋を過しけるが又左衛門重病に陷りて泉下の客と成しぬい悴又五郎父の遺跡を受繼近習役に召出されけるが若年ゐる故靱負又左衛門の遺言ゐ聽ひ後見を成て家事万端深切に世話いたしぬれば又五郎も靱負を叔父と賴みて朝夕無事と訪ひつゝ杖柱と思ふて暮しけり又五郎い元來武藝を好ま法藏院流の鎗術を學びて一家中に稀成達人にいありぬ又五郎の姉い德川家の旗本阿部四郎五郎方へ緣付ありける故折々阿部家へ赴きてい寒暑の無事を訪けるゐ何時しか旗本の若殿輩と親しく成今日い誰の馳走翌日い彼の饗應にて飲食店へ伴れ又い遊里へ誘引る事の毎度成しが果い不身持の媒酌と成て若氣の分別かの花街に通ふていきぬ〳〵の別れと惜み酒興に乘

七二夜三夜と屋敷へ戻る途を忘るゝとの多かりけれゞ父が貯へし金子も不殘費し借財多く嵩みし故最早何方へ到りても金を工面する的あく去とて朋友の勸めを默止て窮したる懷中を見透されんも殘念なりあど肥まで遊興よ意を奪れし又五郎なれゞ今一度叔父勒負ゞ欺て金子を借受んものをと忍強くも勒負が許へ赴き先祖傳來の正宗と形代として金子拜借いたし度と言けるにぞ勒負い此頃又五郎が放蕩日に增募りて一家中の評判惡く終にい役目も不勤とあらんとの趣きを聞是までも夥多び異見を加へたる上幾度となく用達遣したる金子も少きからねゞ承諾難くい思ひしが渠が望に隨い糸ゞ正宗の一刀を他家へ渡んも斗り難し兎よ角望の金子を遣し正宗を此方へ引揚るが上分別とこゝろに思慮しけれゞ正宗い豫て其許の父より我等へ讓られし品にして斯の如く證書も有事あれど其許が無據入用と有ゞ金子を用達べし早刻正宗の刀を持參して引替にいたされよと有けるにぞ又五郎詮方なく已が家へよ歸りしが正宗を勒負に渡すい遺憾ありとて忽ち惡心を發し正宗の白刃を鈍刀に入替て勒負へ渡し金子を首尾能欺き得しが勒負い日と經て偽物成とい知るとも堪忍強き武士故怒り

を鈍て其儘よ捨置しが或日勒負が他行の留守同家中の若侍兩三輩渡邊方へ來り數馬に面會して申しけるい今日青山の下屋敷に試し物有よし聞及びい故日頃ゆ自慢の正宗の一刀お試しあされてい如何ぞやと勸えられ僥倖父の不在こそ屈竟なれとて彼正宗を携え青山の下屋敷へ同道して二ッ胴を試しけるに思ひの外ある鈍刀故居合す諸士興を覺し扨も噂に聞し正宗の切味美事ありと異口同音に言はやしドッと笑へゞ數馬い思いぬ耻辱を得て面目あく直に上屋敷へ立戻りしが川井久五郎も其所に居合彼正真の川

井正宗と携へ來りて試みけるに喜左衛門村正一世無二の一振の奇作あれバ水も漏さぬ美事の切味に諸士の面々初めて又五郎より靱負に鈍刀を渡し眞の正宗い已が密に所持あして居さりし物よと渠が奸曲心中を憎しみ意直人い其奸心を嘲り咀合にぞ流石不歟の又五郎も大きよ赤面しつ當時下屋敷へ退ゝられて在ける故已が家に歸りしのち斯露顕する上い靱負の親爺立腹して我欺きし罪を糺問に來るい必定最早盲譯の詮術非ざれバ若老人の今にも來らバ斯や爲んと覺悟究えて待受るとも神あらぬ身の靱負い知るべき術なけれバ時過て家に戻りたりしに悴數馬が口惜涙と共に打語れるを聞て靱負歎息あし無事を慮て今日迄い打捨置しが不途も事顕るれバ是非あし渠か罪と糺せし上にて正眞の正宗と請取ねバ勘辨なり難しと中間壹人供に連下屋敷ある又五郎が家に赴き玄關より案内を乞ふて奥に通り偽物を與へて欺きし罪を嚴敷責問バ大膽不歟の又五郎も一言半句の答なく差俯向て居たりしが頓て座を立次の間より正宗の刀携へ來り語と飾つて彼是と偽り欺せし其身の罪を詫つゝ靱負の面斷と伺ひ曳と一聲抜打に肩先四五寸切付れバ不意と訝れてアッと斗り後居よ動と倒るゝ

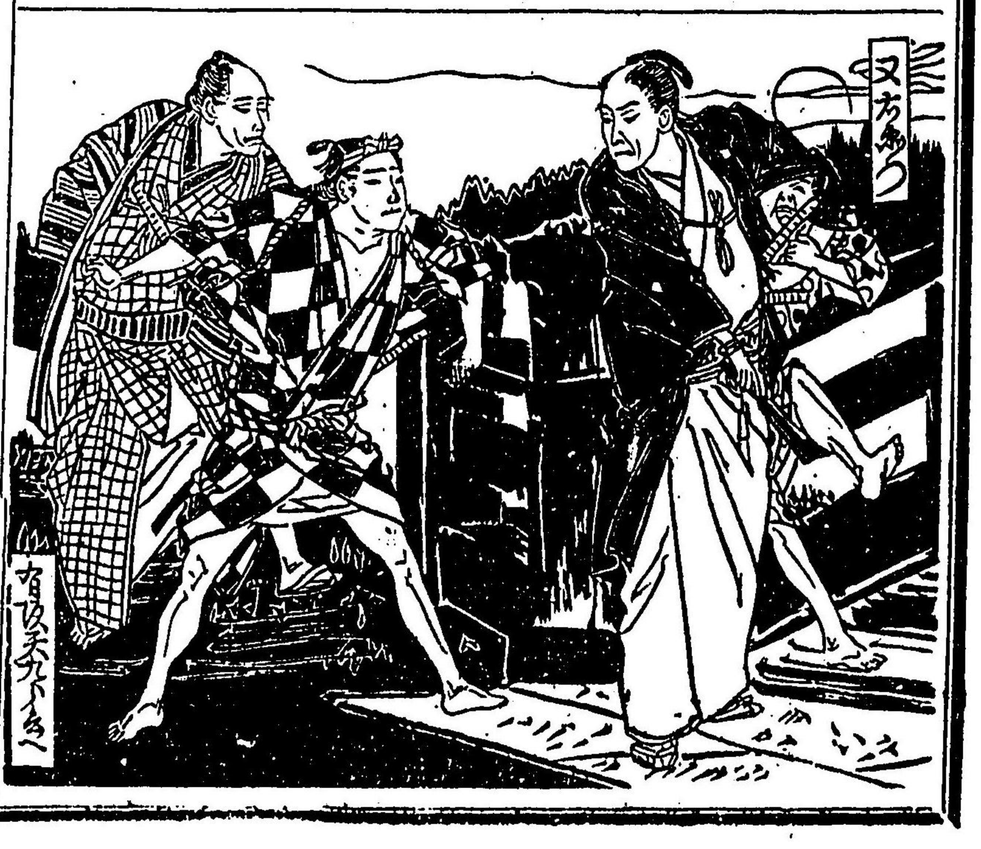
處を遠さゞ再び刺貫く急所の疵手ゐ息絶し靱負の死骸打眺め切たりけりな河井正宗アッ忽地宜と冷笑血を拭ふて鞘ゐ納め驚く老母を騒ぎたまふな我い是より駿河臺の阿部家へ至りて賴むべし直に後より來られよと嘯き示し裏口より駿河臺へと走去ぬ跡に老母が欲深くも彼よ是よと手道具衣類を取纒め一包にあして是と脊負已が家を立退んと外面へ出る其處へ下部が知らせに父の大事と走着たる數馬併に若黨山添伊兵衛の兩人が磯と行逢夕間暮怪敷奴と取押へ見れバ川井の老母あり合點行ずよ玄關より座敷へ踏込見たりけれバ血ゐ染たる靱負の死骸扨い川井又五郎が爲業に相違あるまじと老母を捕へて問糺し速刻委細を認めて目付へ届けを出したり

○第三回

爰に笹川丹右衛門い主君池田忠雄公の命を蒙り河井の老母を乘物に入て阿部家の門前よ到り供人夥多に乘物の四方を護らせ老母を阿部家ゑ渡して前に逃來りし又五郎を替て請取約條とあしけれバ今や遲しと待ゐけたる折柄門の潜扉を開いて出る一個の士あり扨い又五郎

と渡すかと心構を爲す所へ彼士進み近傍我等い池田勘解由と申者あるが今日不途も阿部家へ來りしに又五郎といへる若者がその恩人渡邊勒負殿を害し當家へ走込其身の安泰を謀んと爲る條言語に絶たる曲者あり假令親族の縁深しと雖も不道の者を舍置ていい誠義を立る天下の笑本の名汚と成んとと恐るゝが故惡人の又五郎を引渡し老母い犯せる罪あければ當家に引取長く扶助いたし度と四郎五郎殿が至當の仕扱ひ拙者承つて感心致せし處四郎五郎殿仰らるゝにい假令惡人たりとも親子の情い別して深きものあれば暫時の間母子一世の別盃といたさせ渡貴殿宜敷執成呉よと我等へのたのみ默止難ければ夫い最易きこと成と承諾て是へ推參せり我等も池田一家の者たり何奈本家へ對し不都合をはからふべきや我等へ須臾老母預ケたまいらば依頼を受し拙者の面目何卒後聞濟下さるべしと眞面目に頼をければ丹右衛門承いま一家と有ば余も偽言を吐て欺むくとい有べからずと思ひしかば老母と出して渡しけるが暫刻をそごせど更に又五郎と引き渡すべき容体見へねば心急ちち催促に及びなる門内人聲ありて嘲けり笑ふ爲体なりけるゆゑ偖い舌長なる池田と

やらに欺かれしか遺憾なりと噛をあして門の扉を嚴しく打叩き罪人又五郎を渡されよと呼ぶ叫ぶ出逢者なく門扉と堅固鎖しつゝ罵り嘲る聲のみあれば丹左衛門い詮術もあく役目の落度此儘屋敷へ立歸り太守へ何と言譯せん死を以て爲るより分別あしと覺悟極て引俱したる供人を歸らず歸し其身一人菩提寺ある代々の靈を葬りし墓前に至り割腹して憤死を遂しい恥と知る眞の武士と賞そべし太守此由聞し召れ憎き籟本輩の爲業かな捨置ていい我家の恥辱なり一家の人數を狩催し一戰なして彼等が膽を冷させ呉んず



と憤激なしたりけれゞ旗本方ゐても池田家より襲ひ來ゝ必定なりと手配なし防戰の用意調へ待搆へけれゞ既に天下の一大事とも成んと世しを大久保忠教老人の謀らひにて旗本の騷立を取鎮めまた池田家内太輔忠雄ゝ急病にて卒去されたれゞ波風立ず安泰に事治り池田家にてゝ若殿世を繼ぎ彼是の取込にて又五郎の一條ゝ其儘に打捨置たり然るに旗本らゝ日頃大名と威勢を爭ひしと以て又五郎を救助鋒をも交へんとゝ爲しのど大久保老人の說諭に從ひ鎗薙刀を鞘に治るとゝ雖も又五郎を江戸表に置てゝ最危ふしと思ふが故密に其年の極月三州大濱へ遣ゝし暫時彼所に隱し置たり偖も渡邊數馬ゝ父の横死を歎き撿使相濟て死骸を引取泣々葬式を取行ひ早速姉聟なる荒木又右衛門義村の許へ文通にて報知けれゞ荒木夫婦の驚き大方あらず去ども當時和州郡山の城主本多太内記正勝に仕る身なれゞ江戸表へ出府すると能ず依て門弟北藤武右衛門に意中とヤ含て江戸表へ下しけるに折惡數道中筋川支ゑて延引し日と疊て江戸表へ着せし砌ゝ事靜り池田家ゝ嗣君相模守光仲世を占し召て國家安泰ゐ治りし後ゐりき武右衛門數馬の家に着し師匠又右衛門の口上と傳へけるゑぞ數馬ゝ大いゐ力を得て早速仇討冷暇願ひの書面を差出しけるに主君光仲にも仇討願ひ神妙の事ありとて直ゐ聞濟白銀五十枚併に不動國行の一腰を賜りしかゞ數馬ゝ有難く頂戴して冷前を退き九月上旬旅の身支度整へつ北藤武右衛門に家臣山添伊兵衛の兩人を從へ和州郡山へぞ急ぎける數馬の母ゝ猶池田家ゐ殘りて首尾能數馬が本懷と遂て歸る其日と樂みに指折筭えて待居さり日數を重ねて數馬ゝ荒木の許に着し有し委細と物語れゞ荒木夫婦ゝ涙に袖と絞るばかり數馬の心中と思ひやり是より家に留て柳生流の劔法手

練を勉しげる

○第四回

偖も荒木又右衛門が教導の仕方烈しかりければ日あらずして數馬の手練殊の外上達あ及びしかゞ最早又五郎と一騎打の勝負を爲すとも大丈夫と見認し故主君大内記殿へ委細冒上し暇を願ひし處柳生流の極意開傳あ及びなゞ望の如く暇遣すべしとの仰に依り柳生流十八範の内眞劍白刃取の極意と傳授ゆ上て首尾能ば暇たまいりければ妻女の江戸表なる姑の介抱旁々池田家へ遣し心に懸る要もあしと四人連立一先大坂へぞ赴きける是い同家中あ法嶽院流の鎗術師範を爲す櫻井甚左衛門といへる者有又五郎の叔父ある故荒木が發足するとひとしく己も主君より暇を取り大濱へ至ちんと爲しけるに荒木い渠が後を慕行ゞ又五郎が在家の知るゝい必定ありと思ふにぞ晝夜櫻井兄弟の跡を離れず着墓ふて來りし故櫻井い直に大濱へ赴き難く大坂へ登りて荒木を欺き退れんと爲れども荒木い渠等兄弟を見失ふていゝ歟の在所容易に知れ難しと思へゞ片時も離るゝ隙なけれゞ櫻井甚左衛門殆ど當惑に及び弟甚介と盲合せ男達らと頼み或い竹内甚丹を頼み荒木を失いんと謀れども天下無双の劍法名人故却つて散財を爲るのみふて謀計手違ひと成り陸方おくで京都を夜逃し大津の宿へ來りけるが再度荒木ま出會其夜雪陰の壁を破り首尾能逃負せしと思ひたりしま宮の渡場にて又出會遂に江戸表迄同道して己い阿部家へ着し夜ま紛れて江戸を發足に及び大濱差て急ぎたり去い又右衛門手懸と失ひ大きふ當惑せし折から不途も懇意の者に出合大濱より肥前相真へ旗本等が荷物を送るとのとを聞き扨こそ夫に相違あからめと

夜を日に次て走登り伏見の驛に逗留して日々八方へ手分とおし探索を遂たるに山添伊兵衛が蕎麥屋より夥敷出前有しを見認てその事と聞糺せしより不途又五郎が旅宿を探り發し給も樣子を聞合するゑ明日伊賀路へ向て出立する由あれゞ又右衛門小跳して喜び三人の者と引連其日の内に伏見を發足して伊賀の上野の城主藤堂大學殿へ仕る梶原源左衛門い劍學の兄弟弟子なるが故仇討の由を物語梶原より領主大學へ願ひしかゞ早速聞濟有て城下の出口入口へ俄に竹矢來を結廻し夫々嚴重ゑ固めと命せられけれゞ又右衛門い思ふに增りしは乎當の程を有難くは禮ヤ上梶原源右衛門の宅へ引取夜の明ざる内に城下へ出張途ゐる居酒屋にて酒汲かいして英氣を養ひ今や遲しと四人の者刀の目釘に濕りと呉待とい知らず旗本等より又五郎の路次警衛として差添られし人々い

○櫻井甚左衛門○舍弟甚助○竹内鬼玄丹○高木清兵衛○宇佐美五左衛門○星合段四郎○八十島嘉兵衛○長谷部九兵衛○溝口清左衛門○川角源六○桜村金四郎○田村半平○高坂甚五郎○金子佐四郎○岩井金平○關口政太郎○風馬重左衛門此他一流一淚を極し劍學者合せて三十六人業の者として呉服屋重兵衛荷持鎗持縱じて六七十人の同勢あり此者ら當町へ嚴重に固附しを見て心得難し奈何成子細有ての事ぞと往來者ゐ尋れゞ今朝五ツ時より獸物狩の催しとて昨夜火急のお手配と聞て一同意を易んじ然ゞ城下を通り過んと木戸を通入て行先の木戸を出んと爲しける際前後の木戸をゞ閉て行も歸るも許さねゞ一同是いと驚く折から待設たる渡邊數馬續いて荒木又右衛門北條武右衛門山添伊兵衛鎖帷子筋鉄入の後鉢卷を去つかとゞめ襷十字に身輕の出立名乘かけたる有樣に偖いと再度驚

く人々斬成上い是非に及ばず追取包んで四人共返討にして呉んと一同得物携へて討て係るを又右衛門左右に飲と飜かし櫻井兄弟初めとして瞬く隙ゐ二十八人前後左右へ斬伏たり北藤山添の兩人い數馬を助けて三人五人相手と爲し憤激突戰此所をせんどゝ防ぐ程に數馬い川井又五郎と金傳寺の門前にて火花を散して挑み鬪ふと三十余合遂に孝子の切先鋭く流石手練の又五郎も數馬が憤發て切込一刀脇損じ肩口へゞンと切付られ倒む處とあびせかけ止息の刀刺貫かれ首尾よく本懷を遂たりしい花々數もまた勇敢然れバ伊賀の上野の仇討と後の世までも孝子の譽を殘しけり

實說 伊賀越仇討物語 大尾

双紙

明治十七年二月 十五日發行届

（定價四錢）

東京府平民

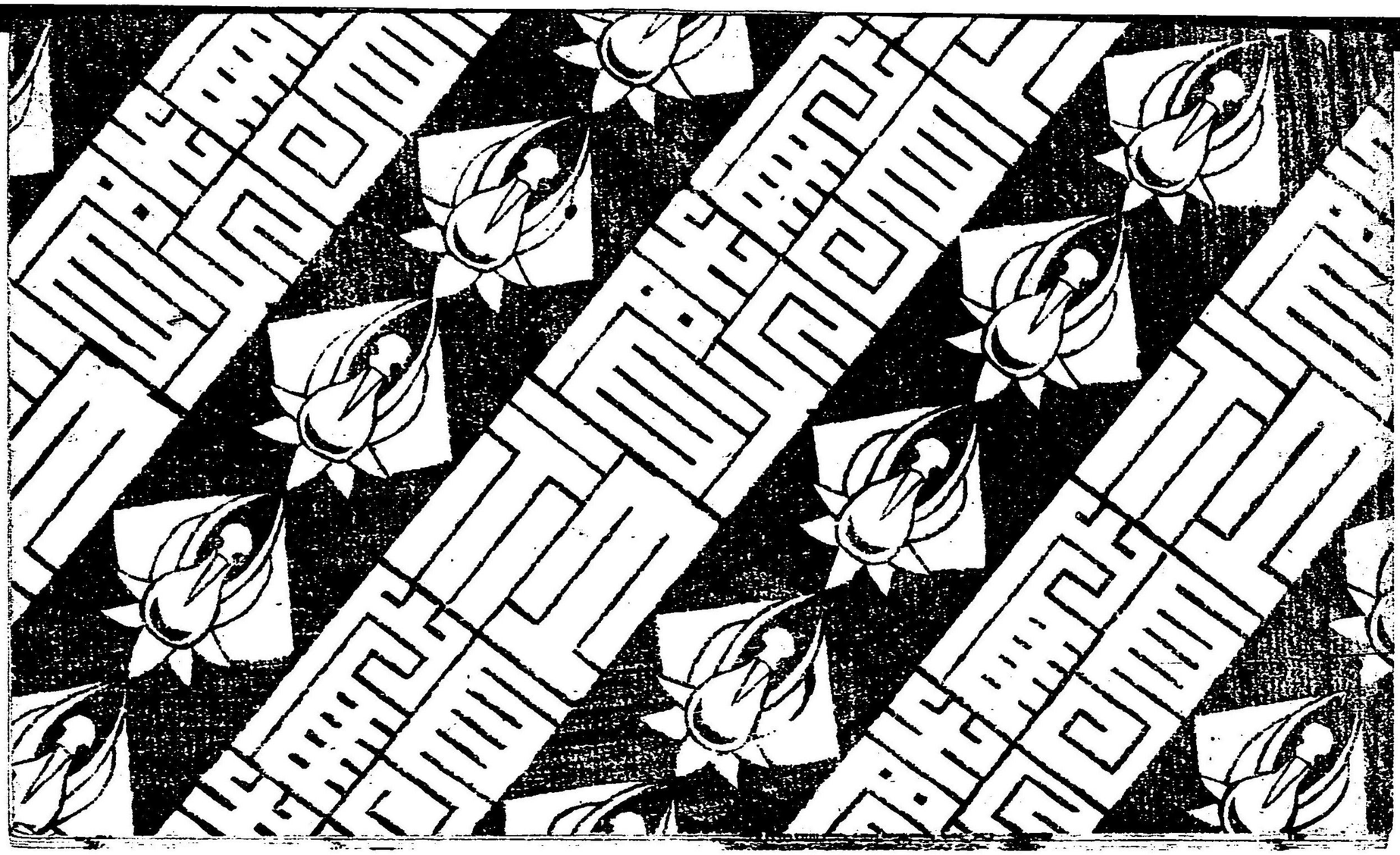
編輯兼出板人 森仙吉

日本橋區横山町貳丁目十六番地

一大岡天一坊政談
一同村井長庵政談
一同畔倉重四郎政談
一同越後傳吉政談
一同松田於花政談
同水呑村九助政談
伊賀越仇討
一龜山孝子仇討
天下茶屋孝女仇討
白石孝子仇討
儒塚孝子仇討
伊達顯秘錄
佐倉義勇傳
船越重右衛門物語
佐野次郎右衛門物語
慶安太平記
寛永箱崎文庫
中山問苔記
名譽紀文一代記
天草大禮記
北遊金澤美談
松前屋五郎兵衛
宇都宮騒動記

一彦左衛門一代記
一氷戸黄門記
一皿屋敷怪談
一雛鶴大戰記
一眞田三代記
石山軍記
豐臣鎮西軍記
清正朝鮮軍記
佐賀怪猫傳
日蓮上人御一代記
親鸞上人御一代記
祐天上人御一代記
弘法大師御一代記
中條姫一代記
小野小町一代記
一休諸國物語
魁神於松一代記
尼子十勇士物語
高尾常右衛門物語
毛谷村六助物語
石川五右衛門一代記
高田馬場義士譽記
川中島大戰記

一曾我物語
一爲朝弓勢記
一小栗判官一代記
一鏡山お初仇討
一鈴木主水物語
一お半長右衛門物語
於旬傳兵衛物語
一國定忠次物語
四ッ谷怪談
阿波鳴戸順禮記
梅川忠兵衛物語
おかち吉三物語
おゆき久松物語
一花川戸助六物語
於三茂兵衛物語
三勝半七物語
一梅若松若一代記
一小野道風一代記
一將門一代記
一木曾義仲一代記
一義經勝慶一代記



特42
850

205017-000-6

特42-850

伊賀越仇討物語（実説草紙）

隅田園　春暁／編

M17

EDV-0009